

# 景観フォーラム

日本景観フォーラム会報 4号 (2012年1月1日)



## 巻頭言

あけまして、おめでとうございます。と申し上げましたが、昨年の3.11東日本大震災の被災地のことを思えば、この毎年当たり前のように使ってきた新年を愛でる言葉が、素直に用いたがたい雰囲気がまだまだ残っているような気がいたします。「天災は忘れたころにやってくる」という名言を吐いたのは夏目漱石の教え子で科学者且つ名随筆家の寺田寅彦とされていますが、この天災が指し示すのは関東平野を襲ったあの関東大震災とされています。関東大震災は1923年9月1日ですので、東日本大震災の2011年3月11日までは100年経っていないようです。私達日本人は100年くらい時が経つと忘れたころであり、その忘却現象を「想定外」という言葉で、自己正当化してきた

ようです。

さて、日本景観フォーラムは、箱根町役場から景観アドバイザーを委嘱されてから早3年目になりますが、本年からはこのアドバイザー活動を本格的に実施したいと思っております。先ず、箱根の景観まちづくりに関しての中長期計画を表明し、「想定外」という言葉を発せられないような100年先を見越した、また100年後にもすばらしいといえる景観まちづくりを提言したく考えております。「良き景観の下には良きコミュニティがあり、良きコミュニティは良き景観を創造する」という私達フォーラムのコンセプトを、まさに箱根で実践したいと念じております。会員の皆様には是非ともこのプロジェクトに積極的にご参加頂ければ幸甚に存じます。

(斉藤全彦)

## 予 定

### ◇定例研究会◇

1月25日 自然と景観  
日本自然保護協会職員辻村研究員

2月15日 川越の景観行政  
川越市景観課加藤忠正副課長

3月14日 吾野の景観  
NPO 法人 COMステーション大河原代表

4月25日 歴史と景観  
神奈川県歴史博物館学芸部長

5月19日 文学と景観  
神奈川近代文学館学芸員(共催)

会 場:JICA地球広場  
地下鉄日比谷線広尾駅下車

2011.11.09 景観フォーラム研究会

# 景観と照明 夜景観の楽しみ方



野村宏幸（照明コンサルタント / 一級建築士）

さまざまな土地の文化、風景は日が沈むと別の表情をもって夜景観に表れる。

光の集合体は美しく、我々の感情に訴え心を奪われてしまう。夜景観に対する感じ方はそれを見た人それぞれに思いがあり、限定されるべきものではない。光の良いところは、それが多少偏ったところで、直ちに社会機能に大きな障害を生ずるわけではないが、気にする人は影響を受けてしまう、あいまいな存在であることである。景観の感じ方もあいまいなもので光との相性は良いかも



も知れない。ただし光には知っておくとより客観的に夜景観を分析できるいくつかのポイントがあり、本日もお越しいただいた皆様には以下の観点から夜景観を見

ていただければ幸いです。

- 1) 色温度（いろおんど）単位K（ケルビン）光の色味の単位
- 2) 照度（しょうど）単位 lx（ルクス）明るさの単位、景観にはあまり必要ではない。
- 3) 輝度（きど）単位 cd（カンデラ）発光点の輝き、まぶしさ（グレア）もこれに関係。
- 4) 演色性（えんしょくせい）単位 Ra 色味の再現性、自然光を基準とする。
- 5) ランプの種類 都市のスケールでは家庭用とはなじみのないランプを用いられる。

以上、やや専門的な話になったが、例えばサッカーのルールを知って観戦する方がよりゲームを楽しめるように、夜景観も時には情緒的に、ある時には理論的に見ていただければと思う。

3.11の震災から節電が求められており夜の景観が否応なく変わりつつあるが、果たしてどのような影響を受けたのだろうか。またどのように感じていますか。

これは良い方向に変化した例である上野駅構内を挙げてみたい。公共空間には安全性、防犯の面などの理由

から過度に明るくしてしまう傾向があるが、この間引き方は歩行するという機能を損なわず、周囲の店舗の存在を際立たせており歩行空間としては歩いて楽しい通路になっている。

このような明るすぎる景観、空間はいやになるほど巷にあふれておりフォーラムとしても重要な検討課題であると考えます。

冒頭に光はあいまいであり、その捉え方は各人の自由と述べたが、景観を整えるための手法はいくつか存在する。



- 1) 必要な光を厳選する。→余計なものを間引くことで本来の姿が見えてくる。
- 2) グレア（まぶしさ）をなくす。→まぶしい光は不快に感じるのを排除すべき。
- 3) 光の色（色温度）を整える。→街路灯などで白色、オレンジ色が混在している状況を見かけるが、景観の統一感を著しく損ねている。
- 4) グラデーションをつくる。→民家からの漏れ光などかすかな光の集合体が街の表情をつくっている。
- 5) アクセントをつける。→ライトアップなど街のランドマークをピックアップすることで夜景観が印象深いものになる。

以上、夜景観をより楽しむために、いくつかのポイントをお話しましたが、きれいな夜景に出会ったときには思い出していただければと思います。また箱根町のプロジェクトも控えているので民様の新しい視点を期待しています。





ブックレビュー

『風景の経験』

J・アプルトン著  
菅野弘久訳  
法政大学出版局  
原著初版 1975 年刊



人類が長い年月の間、環境から受けとりまた環境に与え続けた経験の蓄積が「風土」と言うものであるならば、そこに生きる人間一人ひとりの感情の交歓がなされたものが「風景」というまさに人類の文化の誕生を見ることになる。私達はその文化の誕生を客観的に目に見えるものとして生活レベルまで落とし込む作業が、景観学の課題ではないかと考えられる。景観まちづくり活動はこの「風景」を常に念頭に置くことを忘れてはならないであろう。J・アプルトンの『風景の経験』の原題は、”The Experience of Landscape” となっており、ランドスケープを景観と訳してみることは可能であるが、私達が生きてきた自然環境のなかで経験されてきた感情の交歓を人類レベルで探究しているこの著書を紐解く

と、訳者の『風景の経験』と“風景”を用いた意図が明らかになる。

さて、アプルトンの著作意図は明確である。「私達は風景のどのような点を好むのか、その理由は何か」という疑問に答えようとしたことである。そのために、彼は地理学者として風景に関する多様な研究分野を整理し、「風景とは、まったく人の住んでいない地域を除けば、自然による作用と人間による作用が互いに働いて生まれるもの」とし、古今の文学作品、18世紀ならびに19世紀の風景画を中心に、庭園および建築などの分析後、ジョン・デューイの『経験としての芸術』に辿り着く。そして、動物としての行動と環境との関係に至り、コンラート・ローレンツの動物行動学を援用することにより、風景経験の充足感人類の種の保存に有利に働くという観点から、アプルトン独自の「生息地理論」および有名な「眺望一隠れ場理論」が提唱され、風景美学理論の先達となる。（斉藤全彦）

VOICE

ランドスケープアーキテクトの原点

石見茂夫(ランドスケープアーキテクト)



ランドスケープアーキテクトとして40年の歳月が流れ、この10年間は高齢者ケア関連プロジェクトのコンサルタントとしての業務が中心となった。元来、自然と山が大好きで高校は園芸科、大学は林学科に進み自然の中を闊歩しながら学校を卒業した。普通のサラリーマン生活の経験がしたくて、ある船会社のリゾート開発部門に就職したがドルショックの影響で部門が閉鎖になる。

小さな造園設計事務所に再就職しランドスケープアーキテクトの卵として本格的にスタートしたが、そこは1年で2年分以上の仕事をこなす猛烈会社だった。幸い歯車が噛み合い我武者羅に仕事に取り組み、都市公園、ビル外構、リゾート開発等の計画や設計に没頭した。その後、東南アジアや中近東等の海外業務が増え現地調査や適地選定から詳細設計まで、ランドスケープのコンサルタントとしての役割を根本から叩き込まれた。

この時代の経験からすべての地域開発は周辺環境や敷地の調査を基に目的の用途を踏まえた適地選定からスタートし、ランドスケープアーキテクトはその原点に位置し土地の持つポテンシャルを十分に把握して、最大限に土地を有効活用できる計画を立案する事が使命であると考える様になり今日に至っている。

ユビキタス社会の実現と景観について

河上和寿(河上総合研究所代表)

街を歩いていると、ビルやマンションの屋上に携帯電話などの通信用アンテナが設置されていることに、ふと気づくことがあります。

アンテナなどの携帯やスマートフォンなどの移動体通信用インフラ設備は、ユビキタス社会の実現に欠かせないものです。ユビキタス社会、言い換えれば、生活や社会のいたるところにコンピューターネットワークが存在し、いつでもどこでも情報通信技術の恩恵を受けることができる社会は、私たちの生活をより豊かにします。それに伴って、アンテナやそれに付属する設備が目立つようになってきたのだと思います。

ユビキタス社会の実現、すなわち、増設し続けるアンテナは、もしかしたら、景観を損ねる一因になっているのではないかと感じる場合があります。

景観に対する観念は、人それぞれです。高層ビルや近代的な設備が並ぶ都会的な街並みがよいという人もいれば、自然がたくさんあるのどかな風景がよいという人もいます。また、景観に対するものの考え方や見方、その人がその人自身に関わるものを、どのように意味づけるかによって、受け取る景観が変わってきます。同じ街並みを眺めても、先端技術が集積して近未来的と感じる人もいれば、無機質な人工物に囲まれて息苦しいと感じる人もいます。

私たちのものの考え方や見方は様々で、特定の価値体系についてさえも意見が割れます。そのような中、誰もが納得できて、うまく進むようなことはないのかもしれない。ただ、これからの、ユビキタス社会がもたらす豊かさの実現と、それをあらわすかたちで形成されていく景観には、様々な選択肢があり、そこには重大な意味をもっていると思います。

大切なのは、景観が、情報通信技術の恩恵を受けることができる豊かな社会への実現と、そのインフラ設備によるマイナスイメージを根底に置きながらも、様々な意見によってかたちづくられるものであって、そういうコミュニケーションの場としての日本景観フォーラムにしたいと思います。



これまでのいろいろ

箱根よいとこ

豊村 泰彦

日本景観フォーラムの2011年の忘年会は豪奢に1拍2日で箱根で開いた。1日目は、箱根区都市整備課景観担当のお三方と懇談会を持ち、フォーラムの日頃の活動及び箱根の景観改善についてプレゼンを行った。その後、箱根登山鉄道で強羅に行き。太陽荘で大宴会。次の日は、箱根関所など元箱根周辺を散策して、最後は、箱根町の指定景観協力店となっているととやでおみやげをしこたま買って帰京した。当コラムでは、報告というか印象的だった箱根の2施設を紹介しよう。

■うろこの宮ととや

箱根町は管内の景観良化戦略として、昨年からは景観まちづくり協力店認定制度を始めたが、その指定1号店となったのが、魚介類の加工食品を売る「うろこの宮ととや」だ。目竜宮城のようなインテリアに壁には物語の挿入絵となっているリトグラフが並び、食品店というよりまるでミュージアムの一室のようである。店前に目立つ看板とか、「大売り出し」とかいった幟を出さず、景観に配慮している点が、とても「エライ」ということで、箱根町推奨の証書が下されたようだ。

前回、私が箱根町役場を訪問したのは昨年夏だったが、今回も店に立ち寄り、お土産とともに店主の山本さんの「ととや物語」(浦島太郎の話みたいなものだ)を拝聴した。店主のお人柄も含めてとにかく「おもしろい」店というのが私の感想で、山本さんは箱根町の「お宝人材」としても推薦したいくらいだ。場所的に非常に目立たないがお客さんはけっこう入っているようだ。つまり、大看板を掲げたり大げさな宣伝をしなくとも、人が人を呼べば、商売は繁盛するということなのだ。

箱根も表通りは過剰広告の渦で、温泉町の情緒はない。一方、ととやのような店が裏通りにどんどん増えてくると、観光客はどんどん裏に回って、表が寂れてくるなんてこともあるかもしれない。今やモバイル端末で歩きながら地図やお店情報が引き出せる時代である。大看板で人を惹きつける時代ではないということに早く気が付いて、景観改善に努めることがこれからの商店街の生き残る道だと思う。

ととやのようなモデルもできたことだし、地元が中心になって箱根湯本の裏通りの電柱地中化と石畳化を推進し、裏通りを美の世界に改善する「箱根町裏通り



改革」を推進してはどうか。裏通りは観光客が車をあまり気にしないで回遊できる散歩コースである。安全に回遊できる景観とまずは魅力いっぱいの裏通りにすることことで、箱根はもっともっと客を呼び込める観光地になるのではなかろうか。

■太陽山荘

忘年会の会場となったのは、はこねの老舗旅館で箱根町の文化財に指定された箱根太陽山荘だ。いまは国民宿舎となり、安い料金で宿泊できる。創業はその昔、建物は戦前の木造建築だ。道を隔てて、2棟になっていて、風呂は比較的新しくできた。

古い旅館は元の旅館に継ぎ足して部屋が創られ、それを廊下でつなぐから、非常に構造が複雑になって、しかも階段が2箇所3箇所と複数個所に創られるので、ちょっとした迷路感覚が味わえる。だから、温泉場から自分の泊まっている部屋が分からなくなってしまうこともあり、そういう幻惑体験も老舗旅館の楽しみの一つだ。

もちろん伝統的な日本建築は落ち着いて、機能的な近代建築などは比較にならない。現代の都市は構造が機能、効率優先にできており、味も素っ気もない。近代建築はビジネスには適しているのだろうが、仕事をしない日は近代建築物とはおさらばし、装飾いっぱい、無駄いっぱいの老舗旅館に行こう、というわけである。



活動記録

12月16日～17日の箱根視察+忘年会は、2日間とも快晴に恵まれ、快適な旅行となりました。特に恩賜公園からの富士山と芦ノ湖の眺望は圧巻でした。

